

ヘボンと交流のあった人々

高安伸子

ヘボン (James Curtis Hepburn) は、初のアメリカ人医師・宣教師として安政六年に来日した。明治初年に来日した外国人たちと在日期間の長いヘボンとの間に、職業・国籍・年代等を越えて、交流のあったことが数々の文献に書き残されている横浜居留地にあったヘボンの住まいは、ある種、来日外国人たちのサロンになっていたといえるよう。

今回の報告では、ヘボンと交流のあった人々のうち、シモンズ (Duane B. Simmons) を中心にシモンズの日本での業績を振り返り、その中でヘボンの果たした役割について、考察していきたいと思う。主史料として、岐阜県羽島にある、内藤記念くすり博物館所蔵『米利堅平本常用方』の明治三年・陰曆七月十二日からの横浜においての日誌部分に注目した。この史料には、シモンズがヘボンの施療所

でかなりの人数の患者を診療していたことが、克明に記されている。従来より、ヘボンとシモンズとの交流は知られていたが、その記述からは、シモンズがヘボンの片腕として施療所を手伝っていたことがうかがわれる。

シモンズについては、近年、『日本医史学雑誌』三三巻二号に荒井保男氏が「米医D・B・シモンズ」という詳細な論文を報告されている。その論文を元に、『米利堅平本常用方』日誌部分の記述を吟味し、シモンズとヘボンの交流について、再構成してみたい。

シモンズとヘボンの二人は、同じアメリカ人の宣教師として来日し、来日時期も半月の差はあるが、同じ安政六年であった。こうした点から、『ヘボン書簡集』にも来当初より、ヘボンとシモンズとがたいへんに親しくしていたことが記されている。

ヘボンが在日期間中、宣教師として施療所を開設、医療活動を通じてキリスト教の布教に努めたのに対し、シモンズは来日後、短期間でミッションから独立、自宅で開業をしている。そのシモンズが、明治三年の夏にヘボン施療所において、ヘボンの片腕として診療を行っていたという

事實は、注目に値する。さらに、この明治三年という年はシモンズが福沢諭吉の主治医となった年である。石川幹明著『福沢諭吉伝』の記述によると、発疹チフスにかかった福沢は、初めヘボンに診察を依頼したが、ヘボンは差し支えがあつてこられない、と断り、代りにヘボンがシモンズを紹介したという。明治三年頃の日本に來日していた有能な外国人医師の数は少なかつたにせよ、横浜のヘボンの周囲にはかなりの人数の医師たちが存在したはずである。日本滞在の長いシモンズの方が、日本人を診察するには都合がよいと思われるけれども、自分の周りの医師の中からヘボンがシモンズを紹介し、シモンズが福沢を診察することとなつた理由も、この『米利堅平本常用方』の記述を信用すれば、当然のことのように思われる。

シモンズの日本においての活動については、明治四年の横浜十全病院開設の頃からは、連続的な記録が残されている。しかし、明治三年頃の記録は、大学東校の教師を短期間勤めていたこと、前述のように福沢の主治医になつたこと、といった断片的な記録でしかない。シモンズは安政六年に來日後、時期ははっきりしていないが離日し、フラン

ス・ドイツで医学修行をしてきたとされる。明治三年一月十二日付で、フルベッキの書いた大学東校への推薦書によると、一時日本を離れていたシモンズが再来日したのは、明治二年の終りか明治三年の初めの頃と思われるが、再来日したシモンズは日本での活動が軌道に乗るまでの間、ヘボンの施療所を手伝っていたとの推測ができよう。

その他にも、ヘボンと交流のあつた人々は数が多い。日本人医師では佐藤泰然、外国人医師では影響を受けた人物として、ホイットニー (W. N. Whitney) などが挙げられる。医師としてのヘボンが、明治維新期の日本という国の中で、どのような役割を果たしたかについてを報告したい。

(順天堂大学医学部医史学研究室)